

博士学位申請論文審査要旨

申請学位名称	博士(学術)
申請者氏名	鈴木 康 治
専攻・研究指導	地球社会論専攻 経済社会学研究指導
論文題目	18世紀イギリス経済思想の展開における消費者概念の形成 - ロックからスミスまで - The Conceptual Rise of the Consumer in Economic Thought of Eighteenth-Century England From Locke to Smith

審査委員会設置期間 自 2008年 3月 4日
至 2008年10月16日

受理年月日 2008年 3月 4日

審査終了年月日 2008年10月16日

審査結果 合格

審査委員

	所 属	資 格	氏 名
主 任 審 査 員	社会科学総合学院	教授	東條 隆進
審 査 員	社会科学総合学院	教授	古賀 勝次郎
審 査 員	社会科学総合学院	教授	中野 忠
審 査 員	社会科学総合学院	准教授	周藤 真也
審 査 員	立教大学社会学部	教授	間々田 孝夫

博士(学術)学位申請論文審査要旨

鈴木康治 「18世紀イギリス経済思想の展開における消費者概念の形成
- ロックからスミスまで - 」

1. 本論文は名誉革命の理論的指導者ジョン・ロックから、ニコラス・バーボン、バーナード・マンデヴィル、ダニエル・デフォー、ジョージ・バークリ、デイビット・ヒューム、ジェイムス・スチュワート、アダム・スミスに至る思想家達の思想に「消費者概念」の存在を発掘することによって市民社会の消費社会的性格を浮かび上げようとした論文である。

アダム・スミスの『諸国民の富』は1776年に発行された。スミスはコモン・ウェルスとか商業社会ということで生活世界を表現した。『諸国民の富』は商業社会の経済学である。18世紀イギリスは商業社会が形成されつつあった時代ではなかったか。

そして商業社会とは「消費社会」ではなかったか。生産や交換といった経済行為の目的は消費社会を建設するための手段ではなかったか。経済循環は消費から始まって交換過程と生産過程を経て再消費行為の至るプロセスではないか。

このような問題意識を持ちながら本論文は出発地をジョン・ロックに求めた。

2. 目次は以下の通りである。

- 第1章 序章 18世紀イギリス経済思想と消費論
- 第2章 18世紀消費論の源流と消費者役割の未分的把握
 - 第1節 消費者と貨幣保有 - J. ロック
 - 第2節 消費者と精神的欲望 - N. バーボン
- 第3章 奢侈是認論と消費者概念の脱道德化
 - 第1節 富裕層の奢侈的消費と貧民層の勤労 - B. マンデヴィル
 - 第2節 上流層の奢侈的消費と消費による社会的階層形成 - D. デフォー
- 第4章 奢侈概念の変容と消費者概念の脱社会階層化
 - 第1節 富裕層の愚行的消費と消費者としての貧困層 - G. バークリ
 - 第2節 中流層の中庸的消費と文明社会の諸費文化 - D. ヒューム
- 第5章 経済学体系の成立と学知としての消費者概念の形成
 - 第1節 勤労社会の中の消費者 - J. スチュワート
 - 第2節 商業的社会の中の消費者 - A. スミス
- 第6章 結語 市民社会と消費者概念

3. 第1章では18世紀イギリスが市民社会の「統治」という課題から「経済」的秩序の存在可能性に移ったと言う事がポリティカル・エコノミーとしての経済論が重要になったと指摘する。

第2章では17世紀名誉革命の理論的指導者J. ロックの統治原理たる自由論が社会契約としての所有の保証としての私有財産権の制度確立を重視したことに注目する。そして私有財産権の内容としての財と貨幣の所有、富の蓄積可能性を重視するとともに貨幣使用、財の消費自由性に市民の権利の実現を見た。それと同時に市民の行為・実践が社会的秩序を形成する点に注目した。「市民社会」の経済的可能性の問題である。市民の消費行為の社会性という点に着目したのがバーボンであった。市民の精神的欲望の社会性が市民社会を可能にさせるという指摘である。

第3章では市民社会のエートスの問題、道徳哲学の中心問題としての善悪の価値判断の問題、奢侈と消費行為の関係がマンデヴィルとデフォーを中心に論じられる。マンデヴィルは『蜂の寓話』で「私悪は公益」というテーゼで消費行為の倫理性のエポケー化を図り、奢侈批判性を克服しようとした。デフォーはマンデヴィルのテーゼを批判しつつも富や消費様式を基準とする新しい社会の可能性を見た。消費社会の必然性である。

第4章では「奢侈」という概念が実は社会階層性と深い関係を持っていたということがバークリとヒュームをとおして明らかにされる。封建支配階層の奢侈は社会的に認められながら、市民層の奢侈は批判されたという問題である。18世紀市民層が社会の中心を占めるようになって、社会の支配・従属という構図が崩れ、社会全体を自由行為による秩序を形成できると考えられるようになった。しかし社会には市民層の品性や *politeness* が必要である。社交性、社会性が市民社会を形成するのに必要である。品性とは家柄よりも生活様式に関わる行為基準であり社会の公益性の基準であり、したがって市民社会形成の鍵である。そのために「技芸の洗練」が必要である。市民社会を支える原理としての奢侈と勤労、中流層としての市民階層による消費の自由な選択が可能な社会の到来である。

ただここで新たな問題が生ずる。アイルランドの現実のなかでバークリが直面した「貧困問題」である。富裕層と貧困層の分裂の問題である。この貧困問題に対してヒュームは貧困の中にいる人々は日々の生活に追われ過ぎているために、理性の声に耳を傾けることができないという。下流層の諸個人は根気・忍従・勤勉・廉直以外の徳を實踐する横会を欠いているのに対し、上流層の諸個人は寛大・親切・温厚・慈善などを十分に實踐できる。けれども中流層の人々は貧者の徳を上流層に、かつ富者の徳を下流層にそれぞれを實踐することができる境遇にいるため、人間としてのあらゆる徳を備えた有徳的な性質の人間になる可能性が高い。社会関係を消費関係、商品市場関係に結び付けることによって制度的に中流層はその有徳性をも再生産できる境遇にいるとした。

ヒュームによって市民社会とは中流層が中心になるという思想が確立する。

第5章ではスチュワートとスミスを通して「経済学」という学知が確立される過程が解明される。スチュワートは最初の経済学体系の確立者として位置付けられている。しかしアダム・スミスの圧倒的勝利のまえに経済思想の歴史の中では忘却の淵に投げ込まれてしまった。スミス以降古典派経済学は市場を中心とする経済活動の法則性のうちに自然科学

的法則性の強固な自立性を読み込もうとした。これに対しシュワートは市場の秩序形成力を自然法則性ではなく社会制度・文化的諸領域との相互規定性に求めた。市場はどこまでも人間の諸活動を編成する制度とみなし、社会全体の安定性の中でのみ市場の作用力も有効になると考えた。社会的諸作用との整合的な関係の中に市場を正しく位置付ける課題を果たすものがポリティカル・エコノミーであるとした。ポリティカル・エコノミーは全住民のための生活資料の一定のファンドを確保し、それを不安定にする恐れのある事情すべてを取り除くことである。社会の欲望を充足するのに必要なすべての物資を準備することであり、自由な住民の間の相互関係と相互依存の状態とが形成され、それぞれの利益に導かれて相互の欲望を充足出来るように仕事を与えることである。

シュワートの経済学体系は需要の経済学体系であり、消費の経済学体系でもある。ポリティカル・エコノミーは諸個人間の関係的相互性を確保して社会秩序を形成することである。そして社会は相互的欲望による関係性の構築から始まるのである。しかし欲望関係の複雑化は物々交換の困難性を生み、貨幣の導入と共通価格の決定を必要とさせ、社会に市場制度の形成が必要とされる。

ロックの私的所有権の確立としての貨幣経済化の必然性がシュワートによって消費社会の建設の方法としての貨幣経済化として再確認される。

そしてスミスも消費の経済学に強い興味を示し、経済成長や経済的繁栄にとって消費性向が重要である商業社会の経済学を確立していった。スミスは人間諸個人の行為の出発点を人間の諸感情に求め、人間の社会状況の形成的契機も感情に帰着させた。そして最も重要な感情が同胞感情、シンパシーであり、これが社会秩序を作り上げる。そして日常生活を可能にする消費活動、個々の社会的影響力からすれば微小である消費行為が継続的かつ累積的圧力を作り出し、社会に変革と方向性を与えることになる。前市民社会においては封建領主としての大土地所有者が富を独占し、社会全体の貧富の格差を拡大させた。しかし市民社会では商人層が生産する富と富裕によって消費者階層を育てることによって社会が運動体となる。この社会は「自然的自由」を原理とする社会たり得る。この社会をスミスは「商業社会」と読んだ。

このようにして17世紀イギリスで探求された「市民社会」の存立可能性、統治可能性と言う課題から次の課題へ即ち、J. ロックによる市民社会の貨幣経済化による自由な消費社会の形成可能性として追及されていく。バーボンやマンデヴィル、ヒュームに至る欲望的消費論に基づく市民社会の可能性が論及された。この「貨幣的消費論」と「欲望的消費論」がシュワートの貨幣的経済論とスミスの欲望的消費論として完成する。学知としての経済学はシュワートの貨幣的経済学とスミスの欲望的経済学の統合によってもっと豊かな学知としての経済学体系を確立出来るという重要な指摘を得る。そして18世紀にイギリスで形成された市民社会は市民の消費行為から市場交換と分業による生産過程の統合としての経済循環を内包する社会であるという理解が得られる。一般に局部的市場圏から地域的市場への拡張を経て国民的市場圏が18世紀にイギリスで確立したという経済史の研究成果ともマッチする。

4. 本論文の貢献は18世紀イギリス経済思想、経済社会を「重商主義」の時代として位置付けたことに対する批判としての意義を提示した事にある。「重商主義」という規定は国際貿易がもたらす奢侈が社会を墮落させるという視点と、スミスによって強く主張された「重金主義」批判という視点に注目するようにさせる。しかしそれ以上に封建権力を温存した君主国家体制批判という視点が重要性を持つ。

これに対し鈴木論文はイギリス名誉革命以降の市民社会の形成力に注目すべきであるという視座を与えてくれる。そしてこの視座を確立するためにロックからバーボン、マンデヴィル、デフォー、バークリ、ヒューム、スチュアート、スミスまでの言説の中から「消費者概念」を抽出した努力は高く評価できる。多分内外の経済思想研究史上重要な研究である。

しかし問題点もある。審査員から質問が提起されたように市民社会形成論として「消費者概念」を言説化しようとするなら、市民社会論をはじめに展開してファガーソンを論じないのはどうしてかという問題、奢侈概念から消費者概念に移行する歴史的・社会学分析が甘いという批判、18世紀イギリスで社会学概念としての *politeness* へのもっと深い分析の必要性、そして市民社会形成力を消費者概念という言説に託すことで十分なのか、さらに消費者概念分析の普遍性と現代生活世界への提言力の弱さが指摘された。それらの批判点はやはり奢侈論から消費者論へ展開を可能にする上で当時最も重要であった「重商主義」論との対決が徹底されていないことによるものと思われる。このことが「欲望的消費論」と「貨幣的消費論」のロックにおける未分化問題のとらえかたの曖昧さを残している。

そして市民社会の経済社会学的課題が今日重要になっている。それも市民社会の「重商主義」問題である。J. M. ケインズは『雇用・利子及び貨幣の一般理論』で産業社会での「雇用」創出のためには公共的投資を含む有効需要の拡張が必要であるというテーゼを提示したが、市民社会での市場的欲望的消費と貨幣的消費の関係がどうあるべきかを今日的課題として残している。この課題を解明する視座への解明の糸口がまだ明確になっていない。今後の課題としてこの解明に向かって欲しい。

しかし課程博士の学問的水準を満たしているという判断から審査委員会全員の一致をもって早稲田大学大学院社会科学部研究科博士号(学術)に推薦する。

審査委員

主査 早稲田大学教授

早稲田大学教授

早稲田大学教授

早稲田大学准教授

立教大学社会学部教授

東條 隆進

古賀 勝次郎

中野 忠

周藤 真也

間々田 孝夫